

甲府ルーテル教会にて（3） 愛

――ロマ書第8章31～39節――

1976年8月15日（甲府）

小池辰雄

義と救が同義語 義の反対は罪 神の義 靈然神然たる実存者キリスト 我は在りて在らしむるもの 義即愛、愛即義 神の義の実体キリストにおいて福音が現れた キリストという愛の実体 「イスラエルよ聴け」 拝一神教 神さまの愛の極点は十字架 十字架の事態に真剣勝負で自分をぶつける キリストに祈りかかれれば聖霊が臨んでくる 贖罪の愛と永遠の生命を与える愛 「愛の讃歌」 もし私にキリストがないなら 劇的有機体的神学 愛はすべてを荷いぬく 神の愛が反射して キリストの信望愛がここで一つになって燃焼する

【ロマ8・31～39】

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。 32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。 33 誰か神の選り給える者を訴えん、神は之を義とし給う。 34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。 35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。 36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。 37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。 38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

●義と救が同義語

聖書の宗教は、旧約から新約にいたるまで縦糸と横糸がある。縦糸は義で、横糸は愛――経線、緯線といえますね――垂直線が義で、水平線が愛である。図で書くと、それ自身が十字架の姿になる。

旧約聖書で非常に義を叫んだのはヨブです。ヨブは、「わが義」と言つて、

「自分は神さまの前に義しい」

と言つて、友人たちと大いに論議をするわけです。



「我は固くわが義を保ちて捨てじ」

なんて、ヨブは言っている。いろんな友人たちが言ってきた嘲（あざけ）るけれども、

「わが目は神に向かい涙を注ぐ。願わくは彼ひとのために神と弁論し、ひととその友らとの間を審（さば）かんことを」

と言って、ヨブは自分の義を誰かが仲助けしてくれないかと——仲保者ですね——そういったことを期せずして語っているわけです。

詩篇でも、「わが義」といつて神さまに迫っているところがあります。詩篇31篇1節に、

「汝の義をもて我を助け給え」

という言葉がでている。神さまに向つて、「汝の義をもつて私を助けてください」と。また、

「汝の義に従いて我を審（さば）し給え」

と。「我を審（さば）し給え」というのは、私のために審（さ）みてくださいという意味なんです。

「義をもつて助けろ」

と。そういう不思議な言葉がある。詩篇24篇5節には、

「その救いの神から義を受ける」

という言葉が出てます。このヘブライ語の「セデカー」（義）という字が、七十人訳聖書によると、「エレーモスシュエー」「あわれみ」という言葉に変わっている。

旧約聖書で一番顕著なのは第二イザヤ書（イザヤ書40～55章）ですが、51章には、

「わが義は速（すみ）やかに近づき、わが救は出でたり」

という。これは神さまの言葉です。「わが義」という言葉と「わが救」という言葉が同義語に使われている。旧約でもう既にこの「義」という言葉が、「救い」とか「恵み」という言葉と意味が同じように使われている。特に第二イザヤ書ではそれが顕著なわけです。これは非常に注目すべきことなので、キリストが、

「まず神の国とその義を求めよ」

と言われた。パウロはローマ書で、

「神の義はその福音のうちに表れ」

と書いている。この言葉がルターに始め躓（ず）きになったわけです。この義が救いで、審判する義ではなくして救う義であるという。これがルターさんには始め分からなかった。あの頃のカトリックは非常に審（さ）みの方の義で、キリストは審判者として恐れられていた。だから、キリストの前に一生懸命で自分を正（ただ）しようと思つて、模範的修道僧であつたけれども、ルターは人には誉められても、自分はちつとも平安がない。いよいよ苦しくなつて、とうとう独房でぶつ倒れてしまった。

「いかにして神の前に義であるか」

という問題にとつとんで、もう少し置いておけば、ルターは本当に死んでしまうところだった。同僚がドアを蹴破（き）つて入ったら、ルターは真（ま）つ青（あ）になつて倒れていた。



●義の反対は罪

パウロがローマ書7章で、

「自分の思うことは自分はできない。善は思うんだけど、自分の肉の中に別な法があつて、どうにもならん。ああ、われ悩める人なるかな、この死の体^{からだ}より我を救はんものは誰ぞや」

と。生ける屍体^{しかばね}です、パウロも。そのパウロは、しかしながら、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言つて、大いに誇つていたわけです。マルチン・ルターも始めは律法の義で行つたけれども、律法の義ではどうにもならんことが分かった。イザヤ書の中にも、

「人の義はまるで腐つた布切れのごとし」

なんていう言葉がありますが。要するに、「義」の問題は、その反対は「罪」になりますから。ルターも「わが罪、罪、罪」と言つて非常に苦しんだ。

「全ての人は罪びとである」

という。それはもつと簡単にいうと、「我執者」ということ。「自分に囚われている者」ということ。どんなに立派であつても、自分を立てているのが罪なんです。何か悪いことが罪だと思われるかもしれないけれども。まあそれも一つでしょう。けれども、「自己義認」、自分を義とすること、それをパウロがやつていたわけです。それでパウロはキリストに引つくり返された。自己義認者だった。それを「パリサイ」という。パリサイ根性という。キリストが一番嫌いだったのがそれなんだ。自己義認者。キリストの敵は専門の宗教家、学者たちで、

「偽善なるかな、学者・パリサイ人よ」

と、キリストがマタイ伝24章で七度繰り返して攻撃しておられる。

躓いたり転んだりしている人はまだいいんですよ。自己主張しているのはいけない。ダントでも地獄篇で、こういう罪を一番重くしているかというのと、この自己主張者、意識的に自己を立てているやつが一番地獄の底にいる。その一番最たるものがサタンですから。感情的な罪はむしろ上の方にある。だんだん意志的な罪は下になってくる。

自己義認者、我執者——仏教でもそうでしょ——^{ぼんのう}煩惱の我というやつがそれなんだ。即ち、生れつきの我々は「自己中心」である。人間が賜っているいろいろな才能や、いろいろな感性的なもの、五感の作用、それ自身はわるくない。それはみんな神さまから賜っているんだから。それを自己中心にすることがまちがいなんで、それが罪というやつです。「こ

ういう悪いことをしました、考えました」なんていうことではない。自己が立っていること、それが非常に立派そうに外から見えても、いわゆる道徳家のように見えても、キリストはいわゆる偽善よりかもうひとつ奥の偽善を見ている。自己を義とすること。なるほど立派であるが、自己を立てて、傍若無神^{かたわ}とすること——傍ら神無きが若し^{ごと}。傍若無人という言葉



葉があるが、傍若無神、というやつはいけない——これが罪です。

●神の義

「神―我」の垂直線、神に「然り」と言うことが「信」である。自分に対しては「否」と言う。神はプラス、こっちはマイナス。そうすると放電するんです、物理の世界なら。プラスとプラスではダメなんだ。神さまがプラスでこっちがマイナスになると火花が散ってくる。だから、

「自分は何ものでもありません。いや、もう問題ではありません。神さま、あなたが一切です」

と言って、自分を投げ出している。

「オール・オア・ナッシング」(全てか、しからずんば無)

という。イプセン(ノルウェーの劇作家)の中に出てくる。けれども、「オール・オア・ナッシング」ではないんですよ。

「オール・イズ・ナッシング。ナッシング・イズ・オール」

です。無となると一切になる。神さまが無限大になるとこっちはゼロ。ゼロと無限大の世界。神さまは無限無量ですから。こっちはゼロなんだ。それをまだ、2だの、3だのと自分のことを数えているからダメなんだ。ローソクの火が太陽の光に対して一体何ですか。こっちはローソクの火みたいで、向うは太陽の光だ。そういう関係が、「神を信ずる」ということなんです。自分の判断で神を信ずることなんてできません。自分の判断で分かるような神さまは神さまではありませんよ。

「何かしらんが、神さま、あなたの言ってらっしゃること、してらっしゃることは

100%に受けとります」

と。それが信です。その世界が義なんです。自分の義ではない。

「わが義は神なり」

私の義は神であると。そうすると今度は、

「汝の義、汝の救い」

と言う。神さまの方からいえば、「わが義」「わが救い」という。その義と救いは同じだという。この義を受けとることが即ち、救いなんです。神の義——神さまとの関係が完全に「無限大―ゼロ」の関係になってくると——これが救いになる。ちつとも難しくはない。普通、「救われる」というと、なにかこっちが肯定されて「よし、よし」と言われることかと思うが、そうじゃない。守役^{もりやく}ではないですから。神さまとの関係がそのような関係になったときに、これが下からいえば「信ずる」、上からくると「義とする^{よし}」という。よしとしてくださる神さまが義なんだから。「わが義」と言うときには神さまなんだ。けれども、その関係は直接にはいかない。



●靈然神然たる実存者キリスト

その「わが義」というものをもつと具体的に——「神の義」は分からないんだ、何が義だか——それを具体的に、「神さまの義はこういうものである」ということを——説明ではない——事実をもつて示したのがナザレのイエス・キリストである。

よく若い人が、「一体、神はあるかないか」なんてやってますよね。いくら議論して、一神論が結論に出ようが、多神論が出ようが、そんな結論の神さまは、一神の神であろうと、多神の神であろうと、その人を救いはしませんよ。神さまはどこにあるか。

「福音書を見ろ。キリストを見て、そこに神が現れているのが見えない者はいつまでたっても神さまは分からないぞ」

と、私はハッキリ言います。即ち、キリストは神の意志に完全に従っていた。

「十字架の死に至るまで従い給えり」

と。ピリピ書3章に書いてある。十字架の死に至るまで、神の意志に従って行った。

キリストはもう自分の意志なんか持っていない。そうすると、極めて不自由な世界だね、自由、自由なんて言うけれども。しかし、自分の自由に死んだときに本当の神的な自由が来ているんです、神の自由が。だから、イエス・キリストの実存というのは自由自在ですから、天然よりもっと素晴らしい。私はそれを靈然、という。靈然、神然、という。キリストはこの神然、靈然の実存が出てくる。靈然神然たる実存者、これキリストです。

●我は在りて在らしむるもの

出エジプト記3章でホレブの山で火が燃えていた。灌木が燃えていたけれども、燃え尽きない。モーセは、変な火だなと思つて近づいたら、靈火です。靈の火が燃えている。その中から、

「我はアブラハム・イサク・ヤコブの神である。ここは聖所であるから草鞋ぞうりを

脱げ」

という声がして、モーセは跪いて草鞋を脱いだ。

「イスラエルの民がエジプトで苦しんでいる。これを私は助けてやろうと思うが、お前が行け」

「とても私はそんなことはできません」

「いや、心配いらん。私がお前と一緒にいるから」

と。そしたら、モーセは、

「はいっ。あなたが一緒にいらっしゃるなら、行きます」

と言った。即ち、自分の力を問題にしていない。神さまの力を問題にしている。これが「神さまを信じた」ということ。「信じた」ということは、事柄を信ずるのではない。「信ずる」とは、その事態を直ちに全存在で受けとるということです。



そうしたら、

「みんなが、あなたのことを『お前の信ずる神さまは何という名前か』と聞いたら、何と言ったらいいますか」

「私は在りて在るものだ」

と。これは有名な言葉です。「われ在りて在るもの」という。あれはルターの訳でも、「私は在るであろうところのもので在るであろう」なんて訳してある。ヘブライ語の形は、文字通りにはそうですよ。けれども、あの未完了は「であろう」と訳さなくていい。この場合は現在形で訳していい。新しい学者は、「私は在りて在るもの」と訳している。

けれども、私はある夏の夕に太陽の光が雲間からサーッと射している姿を見て、パッと来た。ああ太陽の光熱は、また太陽の引力は地球を在らしめている。太陽が在るということとは、地球を引っ張り回して、その中の生きとし生けるものをみな生かしている。太陽の光というのは生命付ける熱を持っている。そして、地球をもの凄い力で回している。太陽が地球を引っ張り回しているというこの力、それをただ冥想しただけで、ぶっ倒れてしまうですよ。まあえらいことだなあと。

ゲーテが、「偉大な人は単純なことに驚嘆する」と言いました。私は偉大でも何でもないけれども、ニュートンがそうです。リングの落ちるところを見て、パッと気がついた。

太陽が地球を在らしめている。そこで私はパッと来たわけです。「私は在りて在るもの」ではない。

「私は在りて在らしむるものである」

と、私はあの言葉を訳すんです。まだ世界中でそう訳している人はいない。文法的に間違いがあるか知らんよ、私は。けれども、あれはヘブライ語のちよつと母音を変えれば、そう読めないことはない。もともと、あれは母音がないんだから。

「我は在りて在らしむるものである」と。在ることが他を在らしめている。これが恵みの存在です。太陽は地球にとつて絶対恩寵の存在なんだ、物理的に言つて。太陽がいなくなつてしまつたら、地球はどうなるんですか。太陽は物理的に地球の絶対の恩恵者です。私たちが信ずると信じないにかかわらず、神さまは私たちを在らしめている。そのことに気がついたら、もう信ずるもへつたくれもないんだ、本当は。そういうように、この駄々っ子のしょうがない野郎を在らしめている。これが恵みです。

●義即愛、愛即義

在ることが他を在らしめている。これは絶対恩寵の世界です。キリストは、神さまに絶対依存して、従順に従つて、神さまの智慧も力も愛もみんな受けとっている。だから、キリストは太陽なる神さまに在らしめられていたんです。完全に在らしめられたから、

「私を見たものは父を見た、神さまを見たんだよ」



と言われる。一体、在らしめているという姿は恵みの姿でしょうが。これが愛でしょうが。愛の力でしょうが。キリストは神さまに全く従わざるを得ない。ということは、嫌々ながら従っているのではない。平伏して従ってきたら、「われ汝を愛しむ」と言ってきたではないですか、神さまは。

「われ汝を悦ぶ、汝はわが愛しむ子なり」

と。ヨルダン川で洗礼を受けた時に、キリストに響いてきた天来の言葉はそれじゃないですか。変貌の山でも同じ言葉が響いてきた。

「これは私の愛する子、お前たちはこれに聞け」

と。キリストは本当に、神さまとの関係が立っているのが義であつた。義の内容は何かと思つたら、愛であつたということです。

だから、私は垂直線を書いたけれども、この水平線（愛）も垂直線（義）もグルグル回つてしまふよ。それくらいな関係です。義即愛、愛即義というようなことを言つたてかまわない。もし線で表すなら、縦と横でいいけれども、これはもう横だつてグルグル回つてしまつて、どれが縦だか、どれが横だか分からないような姿。私の気合が分かりますか、皆さん。そういう、義の関係が同時に内容は愛であつたということです。信ずるとは実は、愛せられていた。愛するということであつたということです。

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし。律法は

全部これである」

と、マルコ伝12章に書いてある。ルカ伝6章にも出ている。

「父の全きが如く全かれ」

というのはマタイ伝。ルカ伝では、

「父の慈悲なるが如く慈悲であれ。父の愛であるが如く愛であれ」

という。

「父の愛を受けとれば、そのようになるぞ」

というんです。それは我々は直接にはできない。このキリストという神さまの出店に行けばいい。キリストは神の実証体だから。実際に神を証している実証者、証人だから。あかしびと「汝ら、我を研究せよ」なんて、キリストは言っていない。

「わが証人たれ」

と言っている。「わが証人たれ」ということは、手放しでできるかというところできない。キリストに来れば、証人にならざるを得ない。だから、福音書のキリストにぶつかつて降参して、

「ああ、ここに神の義も愛も一切が現れていた」

と、こういうようにして驚嘆してキリストの前に平伏せば、その人は本当の世界に入る。そうでなければ、絶対に入れない。どんなに研究しようが、ギリシア語ができようが、ヘブライ語ができようが、ダメですよ。それは神学の化け物だ。聖霊は権威をもつてそれだ



けのことを言います、ハッキリ。

●神の義の実体キリストにおいて福音が現れた

そういう神の実証者であるキリスト、ここへくる。キリストが、

「力を尽くし精神を尽くし思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

と、「善きサマリヤ人」のところでも言っている。祭司や教法師がやって来たけれども、半死半生の旅人を避けて行つた。けれども、ユダヤ人の不倶戴天の敵みたいなサマリヤ人がそこへ来てこれを担いで旅籠屋へ連れて行つて介抱した。「もし、足りなければまた明日払うよ」と、至れり尽くせりです。キリストは語っているでしょ、とことんまで。あれはどんな底の担いの愛です。

「敵を愛せよ」

とは、「敵をも担え」ということ。この野郎という敵なんだ。けれども、これを本当に担って行く。キリストの愛が来れば、敵を愛することが我々ができるんです。生れつきの我々にはできない。けれども、キリストの聖霊の愛がくればできる。

「キリストを信ずる」という言葉はよししようと、私は言いたい。

「キリストを体で受けましょう、体受しましょう、全存在で全身で受けましょう。」

キリストの中に全身を投げ入れましょう」

と言いたい。「信仰」という言葉が躓きになるから。観念になつてしまうから。

「幼児の如く我を受けなかつたら、天国に入れない」

とキリストは言っている。「我を信ずる」とは言っていない。

「幼児の如くに私を受けなかつたら天国には入れない。神の国には入れないよ」

と言う。それをキリスト教は、難しくしてしまつて、いろんなことを言っている。なぜ難しくするんですか、こんな簡単な世界を。

「水はH₂Oである」ということが分かつて、我々は喉の渇きがなくなりますか。飲まなくてはダメだ。「キリストは我々の罪を贖いました」という事柄をいくら信じたつてダメですよ。

「本当にお前はキリストを受けとつたか」

ということですよ。

そういうように、受けとることが、中に入ったり、受けとつたりすることが本当の事態だということ。いくら説明したつて、これは説明にならない。私はただ告白しているだけです。神の義を受けとることが即、愛です。だから、

「神の義は福音のうちに現れた」

とパウロが言つたのはそのことなんだ。それをルターは始め分からなかった。「神の義」とはキリストのことですよ。神の義の実体、即ちキリストにおいて福音が現れたということです。「喜びの音信」という。キリストは、「キリスト教を信じろ」なんて仰りはしない。



「この喜びの音信を、この大歓喜の音信を受けとれ」
と言っておられる。

●キリストという愛の実体

キリストという愛の実体。神さまの創造は愛の創造であります。神さまの一切のものは彼の中に現象している。「その満ち足れる徳を」なんて、あの「徳」なんていう言葉ではまだとても言い切れない。「プレローマ」「満ち満ちたるもの」がキリストにある。

コロサイ書2章9節に、

「⁹それ神の満ち足れる徳はことごとく形体をなしてキリストに宿れり。」（コロサイ2:9）

「神の満ち足れる徳は」はむしろ、「満ち満ちるところの神性は」と言った方がいい。

「満ち満ちるところの神性はことごとく形体をなしてキリストに宿れり」

と。実際、実相をなしてキリストに宿られた。神の実相はキリストにおいて見る。

皆さん、本当にこの福音書をそんな気持ちでお読みでしょうね。ある時は、聖書を小分け破つて、マルコ伝ならマルコ伝を、ルカ伝ならルカ伝を、ヨハネ伝ならヨハネ伝を、しよつちゅうポケットから出して、暗記しなくなつていいけれども、始めからドラマのように、ドラマがパノラマのように展開するように、思えばサーツとキリストのドラマが出てくるような、それくらいのことをやりなさいよ。

「気が狂っていると言うなら、神さまのために気が狂っているんだ」

とパウロが言つたでしょ。少しキチガイにならないければダメですよ——そこのキチガイとは違いますよ——普通の気とは違つたことになる。

本当の天気になつたらいい。天の気になればいい。天気でも元気でもいい。元の気。キリストの中に入ると、そのキチガイは本当の元気と本当の天気になる。「今日はお天気がいいなあ」なんて、外の天気はどうだっていいですよ、あなたの方の中の天気はいつも青天、本当の元気だ。「元気出せ」と言つたつて、いわゆる元気ではない。キリストという元の気が入ってくる。これはみんな聖霊です、この気は。霊です。気も風も霊もみんな同じ言葉ですからね、「プニューマ」だの「ルーアッハ」だのという言葉は。自然界の気も霊界の気も同じ言葉で使っているんだから。

●「イスラエルよ聴け」

いわゆる「モーセ五書」の一番終りの申命記の6章4節、これはイスラエル人はみんな、小さい子どもでも知っている。

「⁴イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。

「ヤーヴェーである」と。「ヤーヴェー」という言葉は「実在者」「実存者」という字ですから。



「ハーヤー」「存在する」という字からくる。ただ一人の実存者であると。

5 汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし。」（申命記 6:4～5）

これはもうイスラエル人がしょっちゅうそらんじている。

「汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし」

という。けれども、その奥に、

「神さまはお前たちを愛したから」

ということがある。7章6節から、

「6 其は汝は汝の神エホバの聖民なればなり。」

他の民と分けた民であると。

汝の神エホバは地の面の諸の民の中より汝を擇びて己の宝の民となしたま

えり。7 エホバの汝らを愛し汝らを選ばたまひしは汝らが万の民よりも数多

かりしによるにあらず、汝らは万の民の中にて最も小さき者なればなり。

別なところでは、「お前たちは頑なだから」と書いてある。

8 但エホバ汝らを愛するにより、……

「ただエホバ汝らを愛するにより」と書いてある。

9 汝知るべし、汝の神エホバは神にましまし真実の神にましまして、

裏切らない、まことの神、アーメンの神であつて、

之を愛しその誠命を守る者には契約を保ち恩恵をほどこして千代にいたり…

…（申命記7:6～9）

神と民との関係を旧約では、

「律法を守るものはわが民である」

ということ、ユダヤ人は非常に律法の民になつてしまった。そして、律法は神さまの意

志の表れであるのに、その神さまの御意の方を忘れてしまつて、「律法、律法」となつて、

律法ばかりを問題にして、これを一生懸命で外側から守るようになる。これが「律法の義」

というやつです。パウロは、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言つて、始めは誇つていたのだけれども、あとからそれはパリサイだということが分か

つて、それを

「塵芥の如く思う」

と彼は言つた。

キリストは神から直接にその根本精神をつかんでしまったから。律法を外側から破るよ
うなことをキリストはいくらでもなさつた。キリストは安息日も守りはしない。けれども、
本当の意味で、神の生ける律法を、靈法を彼は守つておられた。だから、



「律法の一点二画も崩れない」

と言ったのは、キリストは根本的な意味です。

● 拝一神教

モーセの十誡は、始めの四つは神さまとの関係です。

「わが^{かお}面の前に何ものも神としてはいかん」

という。あれは本当は、

「わが面の前には、他の神々はお前にとって神ではないぞ」

というへブライ語です。

「他の神々は他の民族にはあるけれども、お前にとっては私だけが神だよ」

という。拝一神教なんです。唯、一神教ではない。

「お前にとっては私が神さまだ。他の神々はどうかだっていい。そんなものは問題に
ならない」

と。だから、これは人格的な、人格関係が一对一です。

皆さんの関係もそうですからね。人間相互の関係を、人の比較をしてはいかん。人間と
いうのは比較を許さない存在だから。甲乙丙があつて、丙が甲と乙をいろいろ比較して、
人格としての比較をしてはいかん。人格というのは絶対性のものだから。さつき書きまし
たように、「幕屋」の関係（三角錐体）だから。神において一人びとりが、相対存在が神にお
いて絶対的なものに造られているから、これは比較にならない。これを比較して、

「甲がこうだ、乙がああだ」

なんてやったら、これは人格関係が成り立たない。甲と乙との関係、甲と丙との関係は、
それぞれ絶対性を持っているから、比較してはいかんです、人間の関係というものは。そ
こに本当の平和がある。ということはどこから来るかというと、この関係（幕屋の構造）か
ら来る。

イスラエルの民は、自分は何ものでもないものを、神さまの方から一方的な愛でもって
愛された。一方愛だね。なぜ、それは愛したかというところ、この愛された者が今度は、この
愛を横へ流す。その使命を帯びているんだ、選民というのは。始めに救われた人たちは次
の人たちを救う使命をおびている。「隣人を愛する」ということは、「隣人を救う」というこ
とですよ。「助け救う」ことが「愛する」です。「敵を助け救う」ことが、「敵を愛する」と
いうこと。愛というのは、感情的に愛することではない。愛というのは、相手を、相手の
生命を、魂を、救いあげることが愛なんです。

私たちは伝道していて、魂が本当に引っくり返って、本当に喜びの世界に、福音の世界
に聖霊を受けて入る。私はそれを見ることほどうれしいことはない。私は地上で一番うれ
しいのは、人がキリストの救いに与^{あずか}つたのを見ること。その他に本当の喜びはない。これ



はキリストの愛の喜び、喜びの音信おとずれなんだから。喜びの音信というのは、相手を助け救いあげる喜びの音信なんだ。自分が、「ああ救われました、うれしい、うれしい」だけではない。これは必ず、聖霊が来ると、愛せざるを得なくなる。救わざるを得ないことになってくる。

愛は観念ではない。霊的な質のものです。生ける生命ですから。永遠の生命の質は愛であります。だから、キリストの中心は、キリストの生命は、この神さまの愛の、神愛の権化ごんげ、その結晶体なんだ、キリストは。それはある時は、怒りに発する。あの宮潔めなんか、キリストは引っくり返してしまった。あれはみんな愛です。愛がさまざまな姿で表れる。

こういった群れでも、「指導者が甲の人を愛して、乙の人を愛してない」なんて、くだらないことを考えるひとがある。そうじゃない。その人、その人で、こちらがキリストに在ってはやり方がある。同じやり方はしない。類型的にはやらない。人格というのはみな個性を持っているんだから。その個性にはどういうように対することが本当の愛であるか。外側から見ると、まるで放つたらかしているような場合もあるよ。しばらくは放つたらかしていることがその人に対しては愛であることがある。それから、本当に弱い人には、こちらから手を伸ばしてやらなければしょうがないこともある。いろいろな形で表れるんです、愛というのは。それを比較して、すぐ何のかんの言う。

●神さまの愛の極点は十字架

しかしながら、キリストはもう即、イエスさまのなさったこと、言ったことは全部、それ自身がどんなに凄いことを仰つたつて、これはみんな一番奥の世界では、愛の言葉ですから。愛の業ですから。けれども、キリストはその愛をいくら表しても、彼らは本当には受けていなかった。なぜ受けていなかったか。ペテロもヨハネも一緒に飯を食べたような人ですよ。弟子、直弟子なんだ。けれども、ペテロなんてのはちょうど漁夫みたいに浮いたり沈んだりしている。大いにキリストに誉められたかと思つたら、

「サタンよ、しりぞけ！」

なんて、やられてみたり。キリストは、「その人がいい」なんて言つたつて、ちつとも「いい」なんて思つてやしません。その時はいいかもしれないが、次の瞬間にはサタンに囚われれば、「サタンよ、しりぞけ」なんてやつつけられてしまう。

「今に、私を二度否いなむぞ」

と。その通りになつてしまった。ペテロはさんざん泣いたけれども、ダメでしようがないけれども、キリストはもうひとつ先を見ている。

「お前たちは祈つて待つていろ。そうしたら、私は助け主を与えるぞ。聖霊を下すぞ」

と。この聖霊、助け主、「パラクレートス」をいただかないで、キリスト者がどうしてキリスト者でありえますか。



彼らが一生懸命で十日間祈っていたら、ペンテコステのあの事態が起きたでしょ。天より風のごときものが吹いてきて、火のごときものが各人の上にとどまったという。それは本当に炎のような事態です。

ヨハネ書簡にも、キリストの愛のことを非常に書いてます。

「神さまがお前を先に愛した」

と。それはそうですよ。こつちから愛せるものですか。太陽の光が地球に来た。地球は生きた。愛せられている。地球は太陽に物理的に愛されている。我々は神さまに霊の世界で、魂の世界で、生かされている。生かされているということは愛されている。「自然に生きている」なんて思ったら、とんでもない間違いだ。我々は自分でつくりあげたものが何かあります。一つもありはしない。みんな受けている、全部。それならもつと正直に受けたいのはいじやないですか。ところが、みんな自分で生まれてきたような顔している、今の若いのは。お父さんやお母さんに対する感謝の念が非常に薄くなってしまった。教育が悪いんだよ。家庭教育および学校教育がダメなんだ、日本は。

神さまの愛はキリストを通してあのよう、福音書のキリストの言葉、行為に全部、この愛が表れているということです。そして、その愛の極点は、言うまでもなく、十字架である。あのキリストの言葉や行為を、いくらただ受けとったって、どうにもならん。それを受けとるカギは、福音書を読むカギは、この十字架です。

●十字架の事態に真剣勝負で自分をぶつける

キリストは、いきなり天界に行けるひとだった。けれども、十字架を通って贖罪の大業を果して、甦った。

「私は、自分で捨てるんだぞ。お前たちが私を十字架にかけたのではない」

とキリストは言っている。相対的現実では、なるほどかけられた。かけるようにキリストは任せたから。キリストは本当に神の力を現せば、とっ捕まりはしませんよ。けれども、キリストはゲッセネマの祈りで神さまに十字架にかけられた。神さまにかけられたので、人間にかけられたのではないんだ。

人間はどうにもならん。いくら努力精進したってダメなんだ。だから、絶対易行道いぎようなんです。しかし、その受けるということを百%の質でもってやらないから、いつまでたっても始まらない。十字架を受けるとということ。贖罪という。

「我執は全部すつ飛んだ。相対的な自分はもはや問題としません」

ということ。十字架の贖罪の事態は、「贖罪」という言葉、観念にとらわれてはいかんですよ。

「私自身をキリストは全部、受けとりなされた」

と。いつも冥想して、祈り心で受けとっていかねければダメなんです、こういう事態は。聖書を読むときに、あのキリストの十字架のあたりは、祈り心で読まなければダメです。



註解書で読んだってダメですから。もう聖書だけでいい。それで祈り心でもってその現実の中に入っていく。

パウロの言葉でもそうです。全部、祈り心をもって、その言葉の発せられているところの、その現実の中に自分を入れてなければダメです。そうすると、もうほとんど痺^{しび}れてしまうか、ぶっ倒れるかというようなことに、現象的にはおそくなります。もうそんな生易^{なまやさ}しい気持なんかでは受けとれない。受けとるということは、これは真剣勝負だからね。努力ではない。これはもう本当に真剣勝負です。

十字架の事態を、贖罪の事態を安易に受けとっているから、観念になつてしまう。真剣勝負で自分をこれにぶつける。もう全存在でぶつかって、

「然り、アーメン！」

と言って受けとる。全存在でキリストの贖罪を「然り、アーメン」と言ってごらんさいよ、全存在で。もう立っていられませんよ。ぶっ倒れるよりかしやうがない。畳の上に平伏^{ひれふ}してしまう。この平伏しの姿に自然になるわけです。こんなありがたいことはないものね、絶対無条件だから。

絶対無条件をいい気な気持で受けとっていたら、その人は本当に受けとつてない。そんなたやすい気持では受けとれない。それを受けとつているのはみんな観念だ。観念で十字架の贖罪という命題を信じているだけ。わるくはないよ、観念だつて。わるくはないけれども、本当の生命の世界にはこないから。

●キリストに祈りかかれば聖霊が臨んでくる

そして、ぶっ倒れたら、痺れるということが――なにも私は現象を言っているのではないけれども――なにかしらんけれども、本当にパーツと自由になったと思つたところに、本当に「主さま！」と言って祈りかからなさい。そうしたら、聖霊が入ってくるから。自由になつたということの、その瞬間をただ喜んでいたってダメなんだ。そうしたら、本当に「主さま！」と言って、このキリストに祈りかかる。そうしたら、聖霊が臨んでくるから。

この祈りというのは、上から臨んでくるものを受けとることが祈りですからね。あるいは、その中に自分を入れる。「受けとる」ということと、「自分を投げ入れる」ということは、同じことを別な角度から言っているだけのなし。卵の殻を内側から破るのと、外から親鳥が突っ付くのが同じだという言葉があるでしょ。そして出てくる。そういう事態が、聖霊が降ってくる事態です。それは祈りの世界で、ことにそういった気持で心を一つにして皆さんが祈ると、霊的なひとつの磁場ができる。

祈りのとき、キリストが大事な祈りをなさるときに、信じないやつは除けたんです。邪魔になるから。ある甦りのことをやるときでも、本当に身内の者、または直弟子の本当に心を一つにする者、そういう者だけでもつてその大事な祈りをなさる。大勢の中にいろん



な疑っているやつがいます、その祈りの磁場の妨げになる。

パウロを見てくださいよ。パウロさんは逆らっていたのだから、一番悪い例なんだ。この一番悪い野郎をキリストは引っくり返した。ぶつ倒した。それだもんだから、パウロは本当に参ってしまった。パウロは「わが熱心」で神さまを信じて、キリストを受けとらなかつた。この「わが熱心」という、神に対するこっちの熱心はダメなんです。「神における、キリストにおける熱心」に切り替わらないと。キリストの中における熱心なら、いくら熱心でもこれは大丈夫です。これはキリストの火が燃えているんだから。自分の人間的な熱心ではないんだから。いわゆる信仰に熱心だなんていって、人間的な熱心なんてものは危ないですよ。そのうちに飽きてしまったり、ズレてしまったりする。

ところが、自分を本当に投げかけてしまつて、「ああ、もう」と言つて、自分が完全にぶつ倒れてしまつてごらんさない。ぶつ倒れる。真剣勝負ときつき言いましたけれども、ぶつ倒れればいい。そうすれば、中へ入ってしまうから。そうすると今度は、ここでもつて聖霊で燃えるから、生命がぐるから、今度はここから熱心ならざるを得ない。熱心なんていう言葉は使わなくなつていい。キリストの力が、生命が、愛が、溢れてしょうがないから。この角度が極めて大事なわけです。

●贖罪の愛と永遠の生命を与える愛

旧約聖書では、さきほどから時々言いました、イザヤ書の42章から47章、49章、53章というところに出ていくところの「エホバの僕の歌」――あの「エホバの僕」というのは、神さまの意志を受けとつて、それを伝えようとする者――そして、本当に神の意志を受けとつて伝えようとするその、

「選びの器を見よ、御霊をこれに与えた」 みたま

と書いてある。「聖霊」と言つてはいかんですよ。旧約では「神の霊」です。「聖霊」という言葉を本当に使うときには、これは「キリストの霊」のことですから。旧約聖書にも、「聖き霊」という言葉もあります。けれども、これは何といつても、キリストを経ていなければダメなんです。預言者はどんなに大きな預言者であっても、

「天国のいと小さき者はこれより大いなり」

とキリストは言っている。贖罪のキリストを通らないところのものは、やはりダメですから。預言者はそこを望んでいる。イザヤ書53章というのはまるでキリストの本当の預言ですね。

「我らの不義のために彼は碎かれて、我らに平安を与える。その傷によつて癒

されたり。我らの罪をも彼は担ってしまった」

と。本当にキリストを預言しているようだ。知らないで預言しているんだ、預言者というのは。しかし、何か本当に自分がそのような境地に入ったか、あるいは、エレミヤみたいな預言者を見て言つたか――それはどうでもいいです――とにかく、その贖罪のキリス



トを本当に預言しているのはイザヤ書53章です。これが即ち、人の罪を贖う愛の極致です。私たちはこのキリストの霊的な生命の愛、これによって贖いとられて、そして同時に直ちに聖霊が来た。即ち、十字架の愛であるが、聖霊がまた愛である。贖罪の愛と、今度は、永遠の生命を与える愛と、これは離すことができません。罪から自由になった。けれども今度は、人を助けることが自由であるところの愛です。罪からの自由と、人を救うところの自由なる愛。この十字架の愛と、聖霊の愛が、これが一つなんです。十字架と聖霊は離してはいかん。

「聖霊、聖霊」と言つて、十字架を抜きにすると、へたすると、聖霊が今度は悪霊に、他の霊に変わってしまう。十字架はいつも土台になっていなくてははいかん。けれどもまた、「十字架、十字架」と言つて、聖霊の方へ行かないと、これが観念になってしまう。一般の信仰がこれでしょうが。だから、十字架と聖霊は離すことができない。その間に復活というのが、キリストの復活の生命がありますけれども。「十字架・復活・聖霊」のこの事態は、私はこれを「三相一貫」と言う。三つの相は一貫している。

愛といえば――観念ではないですから――キリストの福音書の全実存と、その十字架に極まったところの実存と、復活、聖霊。全部これはキリストの愛ですから。だから、

「主さまー！ キリストさまー！」

と呼んだときに、その全体が瞬間のうちに自分の中に響くようなことにだんだんなっていく。「主さまー」と言つて入ってしまうと、それから今度は、具体的な祈りをしてごらん下さいよ。今度は力強い祈りになっていくから。自己本位でなくなるから。キリストの栄光の現れたための、キリストを証せんがための、祈りになってくる。「ために」というのは二段構えの言葉で私は嫌いなんだけれども。即、その世界。即如そくじょの世界です。そういう即如の世界に入る。

●「愛の讃歌」

パウロというこの信仰の使徒が、また実に「愛の讃歌」と言われるコリント前書13章を書いた。自分の訳をちよつと読ませてもらいます。

「たとえ私が人間や天使の異言を語っても、

もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまう。

²たとえまた、私に預言する力があり、すべての秘儀とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があつても、

もし私に愛がないなら、

私はむなし。

³たとえまた、私の全財産を施し、



また私のからだを焼かれるために渡しても、
もし私に愛がないなら、
私は無益である。

4 愛は寛容であり、愛は情け深い。
愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。
5 不作法をしない、利己的でない。

いらだたない、ひとの悪をことあげしない。

6 不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。

7 愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、
すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。

8 愛は断じて滅びない。

しかし預言はすたれ、

異言はやみ、

知識もまたすたれよう。

9 なぜなら私たちの知るところは部分的、
私たちの預言も部分的であるから。

10 完全なものが来る時、部分的なものはすたれる。

11 私たちが幼な子であつた時には、

幼な子らしく語り、

幼な子らしく思い、

幼な子らしく計っていた。

おとな
成人となつてからは、

幼な子らしいことは捨ててしまった。

12 私たちは、今は鏡で謎めいて見ている。

しかしその時には、顔と顔を合せて見る。

私の知るところ、今は部分的である。

しかしその時には、私が完全に知られているように、

完全に知るであろう。

13 そういうわけで、いつまでもなされるものは、

信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。」（コリント前13 私訳）

●もし私にキリストがないなら

素晴らしい言葉ですね。パウロは、天使の異言を語ることもできたし、預言することも



できたし、素晴らしい奥義をも極めた。彼はみんなこれをやっているんですよ。けれども、「もし、愛がないならば」と言うんです。こういうものをけなしているのではない。そういう賜物はみんな結構だ。大いに求めろということをこのコリント前書12章でも言っている。14章でも言っている。その12章と14章との間に13章があつて、ここで一番大事なものはこれだぞと言う。他はどうでもいいというのではないけれども、これがもしなければ、いくらこつちがあつてもダメだと。大事なのは愛であるという。

それは本当にそうですね。他はなくなつていいですよ。これは賜物だから、賜物というのはそうは来ないです。神さまは、この人にはこの賜物を与えようといつて、それをくださる。賜物を、あるときは求めてもいいけれども、「賜物を求めても、得られないから、私の信仰はダメだ」なんて、そんなことはありませんよ。「カリスマタ」（賜物）というのはいろいろです。賜物は多いけれども、聖霊は一つです。これは万人に来る。賜物は人によつていろいろである。来なくなつて、来たつて、どうだつていいんだ。けれども、この聖霊が来れば、何か賜物が生じてきます。何か必ず来ます。

「愛は、愛は」とパウロが言っているこの愛を観念化してはダメですよ。「もし、愛がなければ」というところを、「愛」を「キリスト」に代えて読んでください。

「もし、キリストがなければ」
と。キリストは愛の実体なんだから。

「たとい私が人間や天使の異言を語つても、もし私にキリストがないなら」

と。これが一番よく分かる、「愛がなければ」なんて言うよりも。「そうか、私はもつと愛を深くしなければいかなかな」なんて、ダメだよ、それでは。

「もし、キリストがなければ」

と読む。キリストは誰でも無条件に受けられるんだから。「天的なアガペーという愛がなければ」なんて言つて、「アガペー、アガペー」なんて言つて一生懸命にやっているうちに、アカンベーになってしまうんだ（笑）。そんなことではダメですよ。

「もし、キリストがなければ」と、今までそう言つた人がいますか。私はハッキリ言います、
「もし、キリストがいなければダメだ。もし、キリストがお前の中に生きていなければダメだ」

と。「キリストが」というのは、「キリストの御霊が」「御霊のキリストが」ということ。何と言つたつていいですよ、そんなことは。それはみんなそういった霊的な現実の世界だから。そう言つたら一番分かる。

「たといまた、私の全財産を施し、また私のからだを焼かれるために渡しても、えらい荒行みたいなことだ。」

もし私にキリストがないなら、私は無益である。」

ダメだよという。キリストの側では、



「他のものがなくなつて、大丈夫だよ」

と。必ずキリストは、必要なときには賜物をくださいますよ。

●劇的有機体的神学

聖歌に、「キリストには代えられません」という歌がある。本当にそうですよ。他のどんなものもキリストには代えられませんと。普通の讃美歌よりかあれの方がいいね。大体、祈りのときには、昔の聖歌——あなた方は「第二部」と言つてらっしゃるが——それを歌った方がいい。歌うときにも、本当にその境地になつて歌わなければダメですよ。歌がまづいいいいのではない。本当に魂から歌っているかということだけが問題。いつもの世界、形式の世界はみんなダメです。

「主の祈り」をみんななさいますね。必ず、その時はその気持になつて言つてくださいよ。あるいは、その中の一句だけでもいい。本当にその気持になれば。ただお題目になつたらダメです。

「主の祈りも十字架につけられている」

とルターが言っている。

「不作法をしない、利己的でない。いらだたない、ひとの悪をことあげしない。」

と。パウロという人は素晴らしい構造の人ですよ、本当に人体のような。パウロというのは人間の身体みたいなもの。

人間の身体は組織ではない。これは「オルガン」、有機体です。だから、「組織神学」なんてのは私は嫌いなんだ。時計は、機械は組織だよな。けれども、生命あるものは組織ではない。キリストの福音の神学は有機体神学だ。しかも、もの凄くドラマチックな構造を持っている。だから、もし神学と言うなら、私は

「劇的有機体的神学」（ドラマテッシェ オルガーニッシェ テオロギー）

と言いたいわけだ。本当の神学は神学を嘲ります。あざけ

パウロは根本の大事なことをグツと言つたかと思うと、今度は、その後で細かいことをいろいろ言っている。パウロはまた律法的な教訓を言っているかと思うと、そうではない。その根本的なことをやったら、あとは実存を、

「普段の生活で、お前たちはこうだよ、ああだよ」

と言つて、一生懸命で説明しているわけだ、ご丁寧に。けれども、これは律法で言っているのではない。戒めて勧めている。それで、それだけを守ろうとするから、またおかしいことになる。それでは福音が律法化してしまう。パウロの精神を間違えてしまう。パウロの一番大事なところをしつかり受けとらないで、そんなところばかり注意したつてダメですよ。

「不作法をしない、利己的でない。いらだたない、ひとの悪をことあげしない。」



ということ——本当の愛の性質の現れ方を——いろいろに言っているわけだ。それは、しかし、もちろん謙遜に聞かなくてははいけません。謙遜に聞かなくてははいけませんけれども、それをただ問題にしていたら、また小さなことになってしまう。大事な根本をつかんでいなくては。

●愛はすべてを荷いぬき

「愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。」

と。私は、「ぬく」という言葉を入れた。ギリシア語にはないですよ。けれども、「荷いぬく」んです、どこまでも。そして、「すべてを信じぬき、すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく」。そのためには、聖霊が来てなければできない。我々がいくら、「自分の信仰」なんて言っても力だところで、くたびれてしまうだけのはなし。御霊が来れば、そういうことにならざるを得ない。また、そうでなければ、御霊が本当にあるとは言えない。「ぬく」、貫くんです。ドイツ語でいうと、「ドウルツヒ」ということ。

ベートーベンが死んだあとで、ベートーベンの石碑を造って、その除幕式の時に、グリンパルツァーという音楽家が演説した。有名な演説です。その中に、

「ただ一つのことのために忍びながら、ただ一つのことを心に止めながら、ある一つのことを追求しながら、一つのこのために一切を投げ捨てながら、この男は全生涯を貫いた。」

という。ベートーベン「音楽」という、この「ただ一つのこと」に全生涯を捧げた。この音楽も、本当に人を愛して、人のためにやるんだと。ベートーベンの魂がああ音楽の中に響いているでしょ。戯れ事でやっているのではない。兼好法師も、

「ある一つのことのためには他のことはどうなっても、どう言われても気にするな。でなければ、本当の仕事はできないぞ」

（二事を必ず成さんと思わば、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥ずべからず。万事にかえずしては、一の大事成るべからず。）

というようなことを徒然草の第一八八段の中で言っている。

要するに、一つのことを中心をもって行く。その一番の中心は、キリストを受けとっていると、それができるんです。それは全部、「人のため」なんて言わないけれども、人のためになっていくんです、その在り方になると。その仕事が本当に人を助けることに、人のためになることになっていく。これが本当の愛の大きな現れ方です。だから、

「一切を荷いぬき、一切を信じぬき、一切を望みぬき、一切を耐えぬく」

その力は聖霊です。聖霊は、キリストは、何にも代えられません。私はどんなものとも



この聖霊を代えるわけにいかない。

●神の愛が反射して

私は46歳のときに初めてその聖霊体験をした。けれども、あなた方は今、20や30歳の方が聖霊の世界に入ったら、どんな素晴らしいことになる。今に見えなくなってしまうよ。キリストの変貌みたいに。どうぞ、どしどし進んでください。「これでいい」なんていう世界はないですから、この福音の世界は。限りなく前進ですから。

御霊をいただいていると、歳を知らなくなる。歳が問題でなくなる。ヒルティという人は「時計なんか要らない」と言った。私たちは、カレンダーが本当の意味では要らないんだ、永遠の世界に生きているから。まあ仕方がないから、カレンダーも使いますけれども。たとえ明日、ぶつ切れましても、決して私の永遠の生命はどうかならない。あなた方も、キリストの御霊を、キリストを御霊において受けたら——キリストを受けるも、御霊を受けるも、同じことです——そうなる。

キリストを受ける、御霊を受ける、神さまを受ける、これは同じことです。パウロの使い方をみてください。「神」と言ってみたり、「聖霊」と言ってみたり、「キリスト」と言ってみたり、彼は自由自在に言っている。それを神学者が分析して、「この場合はこうだ、ああだ」とやっている。パウロはそんなことを考えてものを言ってませんから。御霊に迫られて奔流して、彼はものを書いているんだ。だから、神学に躓いてはいかんですよ。神学を勉強したっていいけれども、決して躓いたらいかん。最後は、

「¹² 私たちは、今は鏡で謎めいて見ている。しかしその時には、顔と顔を合せて見る。」

と。私たちは今、キリストを通して神に愛されている。その愛が、ちょうどここで反射するような具合に、上に向って行く。愛されているから、これが愛せざるを得なく、上に向っていく。「信ずる」ということは「愛する」ということ。何を信ずるんですか。神さまの愛を、神さまがいかに愛をもつて救ってくださったっているか、もの凄いわであるかということを受けとることではないですか。その内容は愛じゃないですか。さつきから言っている通り、

「義は即ち救いであつた。救いは即ち愛であつた」

という。だから、義愛一本です。義愛一如の世界を受けとる。もう簡単明瞭。それだから、「心を尽くし精神を尽くし力を尽くして、主たる汝の神を愛せざるを得ません。尽くさなくなつて、もうその尽くす一番中心は聖霊でありますから」

と。私は無教会時代には、「神を愛する」と言つたって、苦しくてしよがなかつた。ところが、御霊が来たら、これは本当に——炎は上に向って上がっていくでしょ、また、風がくると、炎は横に這う——この火は上に向って神さまに向う火と、人に向って流れる火と



――これは愛の火だ――これは上から来ているから、横に流れざるを得ない。

●キリストの信望愛がここで一つになって燃焼する

その一番中心は、焦点は、十字架なんです。その焦点から燃え上がってくる炎は聖霊です。焦点は十字架で、それから燃え上がってくるのはこの聖霊ですから。その十字架を本当に受けとれば、この聖霊の火が燃えてくる。そして、これが私たちを本当に、死んでも死なない者にし、人を本当に助けるところの、愛するところの、祈りがもの凄い愛の祈りになって進んでいく。

「¹³そういうわけで、いつまでもながらえるものは、信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。」

とパウロは言っているけれども、

「最大なるものはキリストである」

と言ったら――どうなるんですか、そうしたら――信も望もみんなこの中に入ってしまう。信、望、愛、一如です。信と言おうが、望と愛がある。望と言おうが、信と愛がある。愛と言おうが、信と望がある。このまた三つが離すことができない。

その最もの中心は何かというと、さつきから言っているとおり、信は過去から来ている。望は未来から来ている。愛は現在の真上から来ている。この三つのものがここでもって燃焼するわけです。この焦点になってくださいよ、信望愛の。我々の存在の焦点にこれが、キリストの信望愛が来る。キリストの、ですよ。キリストの信とキリストの望みが必ずくるんだから。我々の望みではないですよ。キリストが新天地をもたらす驚くべき望み。キリストが本当に神を信じ受けとったあの実存。それから、キリストは神の愛をうけて、そして十字架に極まり、聖霊を下したこの愛。この上から来るところのキリストの信望愛が――キリストのですよ――これがここでもって一つになって燃焼したら、あなた方はもう空へ飛び上がってしまうよ。

祈りは、ちっとも難しくない。「祈り」というと、何か構えるようなことかと思うが、構えやしないです。自分をキリストの中へ投げ出すのが祈りです。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」が祈りでしょうが。

「南無キリスト！ 主さま、イエスさま！」

と、それでいいんです。あとは、

「アーメン、ハレルヤ！」

でいいんです。あとは何も言わなくなつて。とにかく、「キリストさま！」と言ったら、全存在を投げかけるような祈りにならなければ。祈りの内容がどうだと、そんなことではない。では、全存在を投げかけて祈りましょう。

